

---

# ISアスラン戦記

桂かつら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ISアスラン戦記

### 【Nコード】

N9728Y

### 【作者名】

桂かつら

### 【あらすじ】

あのユニウス戦役から数ヶ月、アスランは事故に遭う。しかし、アスランは死ななかった。

コレはアスラン・ザラが異世界で繰り広げる彼の戦記。

## 第1話 アスラン異世界に立つ

始まりはいつも突然だ。

俺ことアスラン・ザラがこの世界に来てから早1ヶ月が過ぎ去った。日記をこうして書いている訳だが色々と思うところがあるのも事実だ。

だが、俺はこの日記を書いている。

元の世界を忘れない為に。

事のあらましはカガリと喧嘩別れをした次の日のオーブ軍での演習中に事故に遭い気が付いたらベットの上だった。

最初が病院かと思ったが違うみたいだった。

俺は混乱する頭を何とか平常に戻し、体の状態を確認した。

体調は良いのに心が晴れないのはカガリと喧嘩別れした挙句に事故に遭ったと言う何とも情けない自分を認識しなければならない事が心を重くした。

そんな時だった。

織斑 千冬が現れたのは。

彼女は唐突に自己紹介を始める。

「私の名前は織斑 千冬。このIS学園の教師をしている」

そうやってきたのだ。

最初は学校に海岸沿いの学校に墜落したのかと鬱になったが演習は海上で行っていたからそんな事が無い筈だと心を落ち着かせた。

そして、自分も織斑先生に挨拶をした。

「自分はオーブ首長国防軍参謀本部所属、アスラン・ザラ准将であります」

ついで役職と階級を名乗りながら敬礼をしてしまった。

軍人の礼儀を一般市民が何処まで理解してくれるか不安ではあったが軍人の挨拶を一般人にする。

ここまで来ると最早職業病である。

俺をマジマジと見ながら織斑先生はこう呟いた。

「あんな物に乗っていたのだから軍人とは思っていたが……その若さで一国家の参謀本部の准将とは……優秀なのかコネなのか判断が付かないな……」

その言葉に俺は苦笑した。

まあそれもそうだろう。

僅か18歳で参謀本部の准将閣下なのだ。

コネといわれても致し方無い。

そして、織斑先生の言葉で俺は思い出した。

「ジャステイス！！ 俺の機体は！？」

今ここに至って、俺は自分の愛機を思い出した。

そして、織斑先生が言ったIS学園なる学校についても疑問を感じた。

矢継ぎ早に質問する俺を織斑先生は何とか落ち着かせると順を追って説明してくれた。

先ず、IS学園とは『IS』インフィニットストラトスなる機動兵器に関連した技術取得の為に各国が融資する日本国内に設けられた専門高等学校であると言う事。

ISとは希代の天才科学者にして天災科学者、篠ノ之 束なる科学者が開発した宇宙空間における活動を目的としたマルチフォーマルスーツであり、その兵器的側面が各国に注目され軍事目的に利用されている事。

何故かISは女性にしか起動する事が出来ず、何時の間にか『女尊

男卑』なる風潮がこの世界にはある事。

しかも、ISの要であるコアユニットは篠ノ之博士にしか生成は不可能で博士自体がコア開発を中止しその数が467個しか存在しないとの事。

その為、各国の政府や一部の国から認可されたIS関連企業がISコアを独占しISの開発を行っている事などだ。

その話を聞いて俺は何とも脆弱で脆い軍事システムだろう。

MSみたいにOSさえ適合すれば訓練しだいでナチュラルだろうがコーディネーターだろうが関係なく乗れると言うのに。

そして、ある疑問が沸き起こる。

何故、『俺にその様な話をするのか?』と言う疑問だ。

その疑問を問いただした時、織斑先生が鋭い目付きをする。

俺はここからが本題である事を理解した。

何故ならあの時の彼女の目は歴戦の戦士の目であり、もし俺が良からぬ輩で何かこの学園に危害を加えるなら容赦しないとその目が訴えていた。

だがしかし、彼女も存外にお人好しだ。

不振な侵入者である俺に何の拘束も見張りも着けずこの様な医務室に放置するのだ。

しかも一応は治外法権が認められているこの重要施設でだ。

俺の世界では考えられない。

しかも、対等の条件で話をする為に護衛もつけずに俺と一対一で話をしている。

本来ならこういう場合は最低でも護衛を一人、戸口に一人つけるのが普通だ。

ソレすらない。

しかも監視カメラや收音マイクすら存在しない。

何とも甘い。

ソレが俺が彼女に抱いた第一感情であった。

そして彼女は俺の愛機、インフィニットジャスティスの事を説明する。

彼女の話では突如として、18メートルの巨体がISの訓練を行うアリーナに落ちてきたらしい。

その衝撃で近くの職員室の窓ガラスと廊下のガラスが多数粉々に割れたそうだ。

挙句の果てにアリーナの観客席とシールド発生装置がお釈迦で修理するより新しく作り直す方が早い程の被害を出したそうだ。

ざっと見積もっても修繕費が約2億3千万円だそうだ。

不幸中の幸いは今は冬休みで生徒は帰省して殆どいなかったし、墜落したアリーナには人がいなかった事である。

ソレを聞いた瞬間、確かにコレは状況が最悪である事を認識した。

幾ら防御最強のIS技術を応用したシールドでも高さ18・9メートル、重さ79・67トンが遥か上空から落下すれば壊れるに決まっているらしい。

昨日から厄日だ。

カガリと喧嘩別れするわ、演習中に事故るわ、今度は多額の借金が追加だ。

俺は天を仰いでこう言った。

「神よ……俺に何か怨みでもあるのか……？」

と。

その後の話で何とか俺は俺がこの学園に被害を加えるつもりは無い事を理解してくれた。

後、俺の事情も話した。

ジャスティスの所在を問いただした。

その時の織斑先生のあの当惑した。



何と言ったなら良いのやら解らないと言う表情は忘れられない。

そんな顔で彼女はこう言った。

「ジャスティスだったかあのロボット……いやモビルスーツか……  
兎に角、お前の機体はだ……」

「俺の機体は……？」

「ISになってしまった」

流石の俺もこの時ばかりは間の抜けた声を出してしまった。

「兎に角、明日、見に行くぞ。今日はここで寝ろ」

そう言われ俺は織斑先生が出て行った後こう言った。

「本当に厄日だ……」

と。

そして、眠れぬ夜を過ごした後、俺は早朝、織斑先生に連れられて、地下にある研究スペースに案内された。

そこで俺が見た物は、

ジャスティスが約2から3メートルにまで縮小された姿だった。

しかもPS装甲はダウンしている状態でビームライフルとビームキヤリーシールドをその手に持って立っていた。

「ジャスティス……こんなミニマムになってしまって……」

俺はそんな言葉しか掛けられなかった。

「いや、突っ込むところコ!? もう少しあるだろ!? 何でISになったとか、本当にコレ俺の機体? とか! !」

織斑先生の突っ込みを他所に俺は真面目に話した。

「確かに見た目はジャスティスだが……動くのか?」

「ボケて真面目な話に無理やり戻すな!! まあ、いい……結論から言えばお前が乗れば動く。しかも、高度なロックが掛かっていて、ディスプレイには『アスラン・ザラ以外の搭乗は認められない』と言う画面まで出てきた」

織斑先生は俺に向き直りこう言った。

「つまり、お前にコレを動かしてもらいたい」

俺はその言葉にこう言った。

「つまり、俺にISが動かせる。と?」

その言葉に織斑先生が頷く。

「ああ、お前は人類で2番目に男でI Sが動かせる。動かす代わりに日本政府がお前の借金をチャラにするし、戸籍や身分証まで発行してくれる」

借金を盾に脅しか。

拳句、身寄りの無い異世界で身分まで保証とは。

よほど男でI Sが動かせるのは希少価値が高いらしい。

「さらに来年の四月からI S学園にお前は通ってもらう」

俺の意見は無いですか？

「無論あるとでも？」

心を読まないで!？

こうして、俺ことアスラン・ザラの異世界での生活が始まった。

## 第1話 アスラン異世界に立つ（後書き）

うん、何だろコイツ、全然アスランじゃないみたいだ……  
きつとカガリと別れて精神が病んだのだろうきつと。

## 第2話 アスラン辟易する

俺は取り敢えず自分に宛がわれた部屋でパソコンを弄りながら考える。

「力をファッションか何かと勘違いしているなこの世界は……」

俺ははISの各国の操縦者達がファッション雑誌のモデルを飾るのをパソコンで見ながら溜息を吐いた。

「力を持ったその時から何時しか自分も破壊者となるものを……こいつ等は理解しているのか？ 有事の際はこいつ等が真っ先に戦場へ行かなければならんと言うのに……」

俺は指揮官として見た場合、こんな兵力としては最高だろうが融通の利かない兵器に意味があるのかと言う事に対し疑問に思った。

しかし、一番の疑問は篠ノ之 束に尽きる。

「何がしたいんだ？ 彼女は……」

唯、世界を悪戯に混乱させた挙句、自分は雲隠れ。

「利と害がのつりあいが取れてないぞ……」

もういい加減そんな事を考えていると時間になった。

「さて、入学式に行くか……」

俺はすっかり重たくなった腰を椅子から離すとIS学園へと向かうのだった。

恙無く入学式が終了し、1年1組の教室に俺が入ると皆の視線が俺を突き刺した。

正直、コレはキツイ。

（まるで珍獣扱いだ……）

俺はそんな事を考えながら自分の名札がある席に座る。

サ行の席だからまあ、真ん中ら付近だ。

俺の近くにもう一人の男でISが操縦出来る織斑 一夏がいた。

（彼か……織斑先生の弟で俺より先にISを動かした男と言うのは……）

俺がそんな事を考えていると山田 真耶先生が教室に入ってきた。

山田先生のたどたどしい挨拶も終わり自己紹介が順当に進んでいく。

しかし、織斑 一夏はボウとしていたのか山田先生の呼びかけに気付き、名前を名乗った。

しかし、名前だけしか言わず暫くの沈黙の後、

「以上です!!」

には流石に俺も呆れた。

(他に言う事があるだろうに……)

その時、織斑先生が織斑 一夏を叩き倒し、自分の自己紹介を開始した。

黄色い悲鳴で揺れる教室。

そして、また自己紹介が再開される。

そして、俺の順番が巡ってきた。

女子の視線が一段と強烈に俺を突き刺した。

「皆さん初めまして。自分の名前はアスラン・ザラといいます。皆さんとは2年違いの18歳ですが、どうか気にせずフランクに話していただければ幸いです。趣味は機械工学とドライブで今もっている車はアルファアルファロメオのGTでカラーリングは赤です。好きな色は赤色で得意なスポーツはドイツ流西洋剣術が得意です。1年間、よろしくお願いします」

その自己紹介の後に一瞬の静寂。

そして、

『きゃあああああああ~~~~~』  
『~~~~~! カッコいいいいいいいいいい!~~~~~』

「ザラ様と呼ばせてください!」

「きゃ~~~~~マジクール」

「ナビシートは是非私が!」

「お兄様と呼ばせて下さい!」

「デートしてください是非!」

「今、フリーですか!」

「大人の色気がマジパネ!」

「ザラ様! マジ抱いて! 私の処女を奪って!」

「濡れた……」

「アスラン様……ハアハア……」

色々と突っ込みたい。

特に最後の方!!

君達の将来が凄く心配だ!!



何とか織斑先生の怒声で事態の收拾を見たが休み時間が地獄だった。

廊下側の窓際には他のクラスや2、3年生の姿があった。

聞き耳を立てると、

「マジかっこいいー！！ しかも私達より年上だし」

「あの子もなんか年下で良いわね……」

「織斑君のかっこいいけどザラ君のかっこいいわね……」

（正直、視線が辛い……）

俺がそんな事考えていると織斑 一夏が俺に声をかけてきた。

「あの、初めまして、俺、織斑 一夏って言います」

その自己紹介に俺は嘗ての後輩でシン・アスカの面影をその少年に見た。

（懐かしい感覚だ）

そんな感傷を無理やり脇へ追い遣り、改めて自己紹介をした。

「そんな堅苦しくならなくていい。俺の事はアスランでいいし、敬語もいいよ。改めて、アスラン・ザラだ。よろしく」

そう言いながら俺は織斑　一夏に握手を求めた。

「それじゃあ、俺のことは一夏、改めて宜しくアスラン」

そう言い頭をかきながら握手を返す一夏。

その様子に周りの女子が色めき立つ。

「いい！！　いいわ！！　男同士の友情！！　凄く絵になるわ！！」

「ガチBLキタコレ！！」

「シャメで保存ですね。わかります」

「ぐへへへ……」

「ザラ様が攻めよね！？」

「織斑君も捨てがたいわ！！」

俺は思わずこう思った。

（俺は……間違ったのかな……この学園に入る事を選択した事を…  
…）

と。

「何か……いずらいな……」

一夏のその台詞に俺は万感の想いの丈を込めてこう言った。

「ああ」

と。

その後、篠ノ之 箒が現れ、一夏を借りて何処かに行ってから、この801空間と言うか乙女空間に晒される破目になった。

休み時間も終わり、授業を開始する。

山田先生が教団に立ち教鞭をとる姿は正に教師の姿だ。

俺はその姿にヤッパリ教師なんだなと失礼なことを思いながらデスク備え付けのタッチスクリーン型画面に筆記していく。

「とまあ、ISに関する説明はここまでです。この時点で何か質問はありますか？」

その質問に誰も挙手しなかった為に山田先生は暫く生徒を見回した後、一夏を当てた。

「んーそれじゃあ、織斑君、何か質問はありますか？」

その問いかけに一夏は脂汗を掻き始める。

「えっと……あの……その……」

「？ 何ですか？ 織斑君？」

観念したのか一夏は蚊の羽音並みに小さな声で答えた。

「全体的に解りません……」

「へ？」

もう一夏はヤケクソ気味に言う。

「全体的に解らないんです」

ソレを聞いた山田先生は唸るような声を上げた。

「ぜ、全部……ですか……」

「はい……全部です……」

その言葉に織斑先生が一夏に語りかける。

「織斑、お前、入学前に読むテキストを読んでいないのか？」

その質問に一夏は思い出したように答えた。

「ああ、あの分厚い教本？ 読まずに捨てたけど？」

その言葉を聞いた瞬間、織斑先生は強烈な拳骨の一撃を一夏の頭に

見舞った。

アレは痛いぞ。

音からして痛い。

「イツ!？」

「馬鹿者! あれに必読と書かれていただろうが。まったく……ザラ、この馬鹿にISについての基本を教えてやれ」

俺は織斑先生の指示に従い暗証した事を言う。

「ハイ、IS『インフィニット・ストラトス』は宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォームスーツです。ISを形成するパーツは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されています。また、その攻撃力、防御力、機動力は非常に高いが故に『究極の機動兵器』と呼ばれています。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアや『絶対防御』などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることは殆どありません。また、ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出すことができ、さらに、ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ実行へと移せます」

俺の説明に感心したように頷く山田先生と対照的に当然だと頷く織斑先生。

「その通りだ。織斑、コレくらいは教本を暗記していれば誰でも理解できる内容だ。後でテキストは再発行してもらえ」

三時間目が終了し、俺は一夏にノートを貸してやり説明をしながら教えていく。

「とまあ、こんな所だ。コレが基本だからここさえ抑えておけば応用が利く」

その説明に一夏は頷きながら俺にお礼を言った。

「サンキュなアスラン。正直、俺一人なら途方に暮れていたぜ」

そんな時だった、金髪を優雅に靡かせながら一人の少女が俺達に語りかけてきた。

「そこの二人、よろしくて？」

それとかなり高圧的な態度で。

「ん？」

「は？」

その俺達の返事が御気に召さないのか少女は何と無礼なと言わんばかりに俺達に言い放った。

「まあ！？ 何ですの、そのお返事！？ 私に話しかけられるだけ

でも光栄なのでそれからそれ相応の態度と言うものがあるのではないのかしら？」

悪いが、俺は君みたいな礼儀を守らない子供に礼儀を尽くす謂れは無いのだよ。

一夏は少女を見ながらこう言った。

「悪いな……俺、君の事知らないし……アスラン知ってるか？」

「いいや、知らないな……」

俺達の回答に信じられないと言わんばかりに彼女は俺達を捲くし立てた。

「まあ！？ 私を知らないのですの！？ イギリス代表候補生、セシリア・オルコットを！？」

知らない者は知らないし、一々、高々代表候補生の名を知る必要など無い。

しばらく一夏は熟考した後、セシリアに問いかけた。

「なあ、一つ質問いいか？」

「ハン、下々の者の要求に答えるのは貴族の務めですわ。よろしくてよ」

オルコットは優雅な振る舞いで一夏の質問に答えようとする。

「代表候補生って……何？」

その瞬間、聞き耳を立てていた周囲の女子は盛大にすっ転び、セシリアは転びそうな状態を自前の優雅さで押しとどめた。

しかし、器用な女だ。

俺は右手をやりながらヤレヤレと言いたげに頭を左右に振った。

仕方がない、爆発しそうだから一夏に教えるか。

「代表候補生はな、各国のIS操縦者の候補生として選出される奴等で、国家やスポンサーたる企業から専用ISを与えられる。その国の代表選抜に参加することができる者達の事だ。当然、ISはコアが限られているからその席も少ないその狭き門を通りぬけた奴等だ」

その説明にセシリアは目を光らせ誇らしく語る。

「そう！！ 限られた、一握りのエリートですわ！！」

だが、所詮は候補であって代表ではない。

さらに代表とは1人、本当に狭い門を潜り抜けた1人になる権利がある。

高が代表候補生で其処まで自分を喧伝できるオルコットの厚顔さに俺は呆れた。

少なくとも山田先生は自身が凄腕の代表候補生であったにも関わら



ず“所詮”と切り捨てている。

だからこそ俺はそんな謙虚な山田先生を人として尊敬できる。

織斑先生も自身がI Sの世界大会、モンド・グロッソで総合優勝を飾り、『ブリュンヒルデ』と呼ばれているのにソレを誇る気は更々無い。

本当の優れた人は自分の栄光や経歴を声高には叫ばない。

行動で示しているからこそ、彼女達を俺は尊敬できる。

俺はオーブの准将だが其処まで自身の肩書きに興味は無い。

あくまで行動と結果が全てであってソレが国や世界を平和にすると  
言う信念があったから戦えた。

俺はオルコットが立ち去るまでそんな事を考えていた。

### 第3話 アスラン決闘を申し込まれる

HRの時間、クラス対抗戦のクラス代表を決める事になった。

「先生、代表は織斑君がいいと思います！」

一人の女子の発言に他の女子も同意した。

「い！？ 何で俺！？」

一夏が慌ててそう言うが周りの雰囲気が一夏が代表でいいだろうと言う雰囲気になっていた。

ふむ、面倒事から解放される。

俺がそんな事を考えた矢先、一夏が俺を巻き込んだ。

「せ、先生！！ 俺はアスランを推薦します！！」

一夏！！ 俺を巻き込むな！！

周りのクラスメイトもソレはソレでありかもといった雰囲気になりつつあった。

そんな時だった。

オルコットが声高に叫んだ。

「その様な選出は認められませんわ！ 男がクラス代表なんていい恥曝しですわ」

恥曝しときたか。

其処まで言うか普通？

お前には常識と配慮が足りないみたいだ。

それでもまだオルコットの言葉は止まらない。

「この様な屈辱をこのセシリア・オルコットに1年間味わえとおっしゃるのですか！？ 大体、文化としても後進的な国で過ごさなければならぬ事事態、耐えられない苦痛ですわ！！」

その言葉に流石の俺もつい口が滑った。

「ほう？ ではその文化としても後進国からISコアを恵んで貰っているのは何処のどの国かな？」

その言葉にオルコットの口が金魚みたいにパクパクと動いた。

その顔は怒りに満ち溢れている。

「イギリスが先進国なら今の発言が文化的で優雅な発言とでも？ フツ、なら俺はそんな人や国を罵倒する文化など興味も魅力も感じんな。没落しても無駄にデカイプライドを持続ける。だからジョングブルは衰退した。そんな過去の黴臭い栄光にしがみつくくらいな

らいつその後進国で俺は十分だ」

その言葉に我慢なら無いばかりにオルコットはキレた。

「あ、あ、あ、貴方！！ 私と私の祖国を侮辱しますの！？」

「フツ、自分の発言は棚に上げてその言い草。笑わせる。もし人の悪口を言うならば自分に帰ってくる事を予期しろ。まさか、自分が一方的に言えると思ったか？ 悪いが俺は自分の友が馬鹿にされているのを黙って見ているほど優しくはないぞ」

オルコットはどうやら我慢の限界だったらしく怒り狂いながら人差し指を突き出し、俺に宣戦布告してきた。

「け、決闘ですわ！！」

俺はその言葉に自分の中に抑えていた感覚が解き放たれるのを感じた。

“ソレ”が目を覚ました。

“戦士としての自分”が。

セシリアはアスランの沈黙を見て怖気づいたと思った。

（フン、所詮、男などこの程度ですわ）

セシリアは生前の父親を思い出した。

母親にオベツカを使い卑屈に振舞う父親。

女尊男卑が明確になった時など更に卑屈になった。

目の前の男も同じように卑屈になった。

そう思っていた。

しかし、ソレはセシリアの勘違いだった。

「ほう？　ならば、討たれる覚悟は出来てるんだろうな？　セシリ  
ア・オルコット？」

アスランがそう口にした瞬間、世界が変わった。

比喩でも例えでも無い。アスランを中心に世界が変わった。

心臓を直接鷲掴みにされた様な感覚。

背中には今まで流したことのない量の冷や汗。

肌は鳥肌がたち。

唇は震えが止まらない。

そのくせ体は動かないのだ。

セシリアは周りを見たとき殆どの生徒が震えながら泣きそうな顔をしていた。

中には呼吸困難なほど荒い息をして泣いている生徒までいた。

あの箒ですら震えを必死で押しとどめて耐えていた。

一夏は椅子にへたり込む。

真耶は半泣きになりながら震えていた。

千冬はその額に冷や汗を薄っすらと流した。

（誰ですよ！？ “アレ”は！？）

今まで温厚だが嫌見たらしい男と思っていたアスランがセシリアには化け物に映った。

そして、セシリアの本能が告げる。

“アレ”と戦うな！

“アレ”の前ではお前は無力そのものだ！

“アレ”から今すぐ逃げろ！

“アレ”はお前にとって死そのものだ！

しかし、セシリアは自身のプライドがその本能をねじ伏せた。

（お、男に、私が男に圧倒された！？ このセシリア・オルコット

が!？ ふざけないで!! 私は代表候補生ですよ!？ それを  
この様な男に圧倒されたなんて!？)

セシリアはその屈辱を怒りに変えてアスランに言い放った。

「じよ、上等ですわ!! この私が貴方を倒してさしあげますわ!  
」

そこですかさず千冬が命令した。

「オルコットとザラが戦いその後勝った者が一夏と戦う。ソレで異  
存は無いな」

その言葉にアスランは放っていた何かをその内に押し込め、元のア  
スランに戻った。

「解りました」

「解りましたわ!!」

それに何とか気を取り直したセシリアが今までの恐怖をかき消す様  
に了解の声を上げた。

やれやれ、コレだけ脅しても立ち向かうか？

俺も大人げ無かったしクラスの奴等には申し訳ない事をしたな。

しかし、この世界の I S 乗りはプライドが高過ぎるぞ。

俺は席に静かに座ると溜息をソット落とした。



## 第4話 アスラン決闘に臨む

俺はオルコットから決闘を申し込まれ早一週間が経過した。

その間、一夏のISがまだ到着しないとかでその長さになってしまった。

俺はその間取り敢えずISの訓練と肉体鍛錬を行った。

一夏は篠ノ之に剣道で叩きのめされていた。

一夏、骨は拾ってやるからな。

さて、俺と一夏と箒はアリーナの管制室横にある操縦者待機室に俺と一夏はISスーツを着た状態で座っていた。

『ザラ君、オルコットさんのISはブルーティアーズ、第三世代型ISで両肩のビット型射撃兵装ブルーティアーズに大型特殊レーザーライフルスターライトmk?に高周波振動ナイフインターセプターです。解りましたか?』

山田先生の言葉に俺は無言で頷いた。

『ザラ、お前とお前のISが本気を出せばオルコットを殺しかねない。そこで今回、お前のISに追加のリミッターを設ける。リミッターの内容は全ビーム兵装の出力50パーセントカット、装甲強度

の50パーセントカット、PIC起動出力50パーセントカット、更にセンサー有効範囲と感知能力の50パーセントカットだ。問題は？』

その内容に俺ではなく一夏と篠ノ之が納得できないと言わんばかりに詰め寄った。

「千冬姉！？ 幾ら何でもソレはやり過ぎだ！！」

「そうです！！ ザラに装備劣化した得物を持たせて両手両足縛り上げて重りまでして目隠しして戦場に出ろと！？ 対等ではありません！！」

その言葉に千冬は憮然として答えた。

『学校では織斑先生だ！ 馬鹿者！ 正直、それでも手加減になるかどうか解らん。更にハンディをつけたいくらいだ。悪いが織斑、篠ノ之。ザラは下手したら学年最強どころか学園最強だろう。多分。そんな男に今のオルコットが挑んでも秒殺だ』

その言葉に一夏と篠ノ之が俺をマジマジと見た。

『ソレとザラ、決して殺すな。人死にはゴメンだ。殺しそうになったら止めに入る。いいな？』

俺は織斑先生の言葉に無言で頷いた。

さて、ジョンブルのお嬢様が首を長くしてのお待ちかねだ。

俺は右手を掲げる。

その瞬間、右手中指の赤い指輪が赤い輝きを放つ。

そして、俺の周囲から光が晴れた瞬間、其処にはインフィニットジャスティスを装備した俺がいた。

ソレを見た一夏と篠ノ之は驚きの声を上げた。

「か、かつこいい……何か騎士みたいだ……」

「ふ、全身装甲！？<sup>フルスキン</sup>　しかし、P I Cが背中に一体化しているISなど聞いたことも見たことも無い。それに色が灰色？　塗装がされていないのか？」

俺は一夏の驚きを背に俺はジャスティスを歩かせる。

「見せてもらおうか……イギリス代表候補生の実力とやらを……」

俺はそんな事言いながらカタパルトのロックを思考制御でロックした。

俺はP I Cの出力を最大にする。

ジャスティスはそれに答えるが如くファトゥム01のスラストノズルが輝きを増す。

『進路クリアー、ザラ君、発進どうぞ!!』

その言葉に俺は前を見据える。

「アスラン・ザラ！ ジャスティス出る！！」

俺はオルコットが待つ戦場へと飛び立った。

セシリアはアスランが来るのを待っていた。

眼窩にアスラン側のピットを見つめながら待つこと数分。

発進許可の青ランプが点灯する。

「来ましたわね……」

オルコットは自分に屈辱を与えた男をどう処断すべきかを考える。

しかし、彼女の思考は真っ白になった。

突如、灰色の全身装甲が速度で飛び立ったかと思えば、灰色は美しいローズピンクに近い赤に染まった。間接部は太陽に反射し白銀に光り輝く。

後ろのPICを広げたその姿は騎士がマントを棚引かせてる印象すら受ける。

赤い鎧を纏った騎士。

観客はそう思った。

「う、美しい……」

セシリアは我知らずそう呟いた。

一夏と箒はその様子を見ていて啞然とした。

「い、色が変わった……」

「何なのだ……あのISは……」

そう、コレこそが、アスラン・ザラが乗機にしてC・E・接近戦最強の機体。

インフィニットジャステイス。

今、異世界にISとして再誕した。

「な、何ですの!?!? そのISは!?!?」

セシリアが金切り声でその機体の名を問い出さした。

アスランは静かに、噛み締める様にその名を言い放った。

「インフィニットジャステイス」

「無限の……正義……」

セシリアはうわ言の様にその和訳を口にした。

俺は左腰のビームサーベルを引き抜き、右腰にあるビームサーベルの柄頭と握っているビームサーベルの柄頭を連結させソレを引き抜く。

その瞬間、桃色の超高熱の刃が左右のビームサーベルの先端から吐き出された。

そして、左腕に持たせた盾を正面にすると同時にビームサーベルを腰溜めにする。

そう、俺がアンビデクストラス・ハルバードで構える得意な構えだ。オルコットもライフルを構える。

その時だった。

突如のロックオン警告。

刹那、俺は体を左に少しスライドし頭を左に傾ける。

「開始の戦鐘も鳴っていないのに発砲か？ 余裕も優雅さも無いな…  
：戦場ではないんだぞ？ 少しは礼儀を守れ、オルコット」

俺のその言葉にオルコットは微笑みながらこう言った。

「あら、挨拶ですわ。挨拶。中々良い挨拶だったでしょ？」

不意打ちが挨拶とは、戦場では確かに儀礼的な物を持ちこまない。試合と戦場は違う。確かにセシリアはワザトロックオンをして馬鹿丁寧にユックリ狙いを定めて撃った。

俺の実力を測るためか。

味なマネを。

まさか2歳も年下に試されるとは。

『オルコットさん、競技は開始されていません。ペナルティーとしてシールドエネルギーを射撃分引いておきます』

「自由……」

山田先生のペナルティー宣告にも優雅に答えたか。

余裕か？

だが、ソレが戦場では命取りと教えてやる。

『それでは、アスラン・ザラ対セシリア・オルコットの試合を行います』

俺は改めてビームサーベルを構え直す。

セシリアもライフルを構える。

『始め!!』

山田先生の声と同時に俺達は動き出した。

先手はオルコットだ。

光学兵器、粒子の尾を引いていなかった事からレーザーだろう。

ブリッツと比べるのもおこがましい程の低出力レーザーだ。

話にならない。

ジャステイスのVPS装甲が100パーセントの出力なら簡単に防げる火力だ。

50パーセントでも精々装甲表面に黒い焦げ目が付くくらいだ。

たいしたダメージにすらならない。

が、

このまま勝っても機体性能が良かったから勝てたと言われそうだ。

仕方ない。

圧倒的で言い訳が許されない程の勝ち方インパクトで勝つか。

そう思いながら俺はキラが飛んできたビームをビームサーベルで切り払っていた事を思い出す。

(フ、ソレもまた面白い)



そう考えた俺は飛んできたビームを回避するのを止めて相手の銃口、目線、腕や肩の筋肉の動きを備に観察しながらビームサーベルを振るう。

その瞬間、レーザーは弾き返され地面に激突した。

私ことセシリア・オルコットは今、とんでもない物を見た。

スターライトmk？から放たれるレーザー弾を事もあるうにあの男は光る剣で叩き落としたのだ。

（じよ、冗談ではありませんわ！？ そんな事ある訳！！）

そう考えながら今度は頭部に狙いを定めて発砲した。

しかし、あの方は、光る刃を巧みに操りレーザーの起動を反らして見せました。

（何て化け物ですよ！？ 私の射撃をいとも容易く！！）

つまりは光と同じ速度で飛んで行くレーザーをあの男はいとも容易く反応するという事。

人知を超えた剣技ですわ。

私は覚悟を決めると同時に自分がアスラン・ザラを舐めていた事をこの場で詫びますわ。

俺はオルコットの気配が変わった事を感じ取った。

フン、やる気かいだろう。

俺は一旦オルコットから距離を取った。

「貴方が初めてですわ。ここまで私を追い込んだのは……」

その言葉と共にセシリアはライフルの銃口を俺から反らした。

「だから……貴方に敬意を払い……」

次の瞬間、浮遊している左右のパーツから2本ずつの計4本の何かが高速で動き出す。

「本気を出させていただきますわ!!」

そして、ソレは俺の周りを高速に不規則に飛び回る。

成る程、ドラグーンいやビットか。

俺はそのビットのオールレンジ攻撃を全て回避してみせる。

正直、眠くなるオールレンジ攻撃だ。

フラガ少佐、いや今はフラガ大将か、やキラやレイと比べたら余りに単調で鈍重で効果的でないビット運びだ。

正直、あの3人のドラグーンの運びはレベルは未来予知のレベルに近い回避するのも一苦労だ。

しかもセシリアみたいに棒立ちではない。ちゃんと此方の攻撃を回避しつつ本体も攻撃をするのだ。

それに比べると甘すぎる。

「当たらなければどうと言う事は無い」

俺はビームサーベルでビットを一つ切り払う。

切断と同時にビットに背を向け次のビットを破壊。

背中と同時に2つの爆発が響く。

「二つ！」

そして、俺の近くを通るビットを切り払う。

「三つ！」

そして、最後は頭部、胸部バルカンで撃破する。

「四つ!! 終了」

そう言いながら俺はオルコットに向かう。

後はコイツだけ。

しかし、オルコットは自分の切り札を落とされたのに微笑んでいた。

まだ切り札を隠しているらしい。

「残念でしたわね？ ブルーティアーズは後2機あってよ!!」

そう言うのとオルコットの腰から砲身がせり上がる。

そして、放たれる。

しかし、俺はソレをバレルロールしながら連結していたビームサーベルを引き抜き二刀流にして擦れ違い様に切り裂いた。

そして、オルコットのわき腹を横薙ぎにする。

緊急に絶対防御が展開されるがソレすらひび割れる。

そして、1秒後、ブザーが鳴り響く。

『セシリア・オルコットのシールドエネルギーエンプティーにより  
勝者、アスラン・ザラ!!』

フム、1分かまあ、時間が掛かったが許容範囲内。

俺はそう思いながらセシリアに手を差し出す。

「オルコット、大丈夫か？」

俺の問い掛けにオルコットは力なく頷いた。

そして、意を決した表情で俺に問いかける。

「なぜ腰のライフルをいしませんでしたの？　そうすれば攻撃のバリエーションにも幅ききますのに？」

その質問に俺はこう答えた。

「ソレも考えたがやはり俺の得意分野で戦わないとお前も納得しないだろう？　だからさ」

その回答にセシリアは目を大きく見開く。

「その為に戦略の幅を狭めたと!？」

「ああ」

その言葉にオルコットは笑った。

悲しくも可笑しそうに笑った。

俺はオルコットが心配になって声をかける。

「オルコット？」

「セシリア」

「へ？」

「セシリアで結構ですわ。その代わり貴方の事をアスランと呼んでも宜しくて？」

俺はそう微笑みながら問いかけるセシリアに笑顔を向けながら言う。

「ああ」

何故かセシリアが頬を赤くしているが本当に大丈夫だろうか心配になって俺の額を彼女の額に合わせる。

「ヒャン！？」

セシリアは可愛い悲鳴を上げる。

「フム、チョット熱いぞ？　大丈夫か？」

「だだだだだ大丈夫ですわ！！　どうしようもなく大丈夫ですわ」

言葉が怪しいがまあいい。

『コラ！！　貴様等何時まで其処にいるつもりだ！！　オルコット、貴様は失格だから外へ出ろ！！』

織斑先生の怒声で俺とセシリアの会話はここまでとなった。



## 第5話 アスラン女難の始まり

所変わって一夏と箒は如何したものかと考えていた。

一夏は半分絶望、半分諦めの表情がその目を支配していた。

「なあ、箒……俺、今からあんな化け物と戦うんだよな？」

その何とも頼りない表情に箒は激をとばした。

「戦う前から諦めて如何する！？」

しかし、次の一夏の言葉に流石の箒も押し黙る。

「じゃあ、俺がアスランに勝てる確率はあるのか？」

「それは……」

「だろ？ しかもアスランは射撃兵装があるんだぜ？」

「じゃあ、懷に飛び込めば！！」

その言葉に一夏は呆れながらも溜息を吐いて言う。

「たとえば潜り抜けられたとしても、あのレーザーすら弾き返す変態剣術の餌食だぜ？ さっき、オルコットに言ってただろ？ 得意な剣で戦ったって……それって接近戦はアスランの土俵だぜ？ 同じ



土俵で戦うとしたら物を言うのは技術と経験と力だ。俺とアスランじゃあそのどれもアスランには敵わねえ」

何時までもウジウジ悩む一夏に箒は怒鳴る。

「戦う前から戦いを放棄して如何する！？ 幾らザラが頭抜けていても相手は同じ人間なんだ！！ 確かに理論的にはお前の勝利は万に一つも無いかもしれない。でも、ソレを理由に戦いを放棄するなどお前らしくも無い！！ 思い出せ！ 一夏！ 私が虐められていた時、お前は数の暴力に屈したか！？ 私を見捨てたか！？ 違うだろ！！ お前は私を殴られながらも助けてくれた！！」

その言葉を聞いて一夏の瞳に力が宿る。

「私はそんなお前だから……！！」

途中まで言いかけた言葉を箒は飲み込んだ。

一夏の様子が変化した事に気が付いた。

「悪い……忘れてたぜ……箒……ハハ……確かに俺らしく無かったわな……何相手が強いくらいで諦めてんだ？ 情けねえ……こんな事じゃ千冬姉に申し訳ないぜ……腹は決まった。後はアスランの装甲に俺の刀を浴びせる！」

その言葉に千冬の名しか入っていなかった事に不服を感じながらも箒は一夏を自分が出る限りの笑顔で見送った。

「ああ、行って来い！ そして勝て！！」

「ああ!!」

2人とも馬鹿じゃない。2人とも勝てない事は先刻承知。だけど2人には敗北の悲壮感も強者への恐怖も無い。

あるのは前を向いて勝利を掴むと言う意思だけだった。

俺は腕組をしながらアリーナ中央に陣取っていた。

アリーナ観客席は喧騒の渦に包まれている。

しかし、一夏の奴、遅いな。

そう思った時だった。

一夏がピットから勢い良く飛び出してきた。

俺は一夏の瞳を見た時、内心驚いていた。

(ほう……勝負を諦めてはいない様だな……いい目だ)

ソレは腕組みを止め手を下ろすと、一夏に語りかけた。

「準備はいい様だな？」

一夏は俺をその強い眼差しで見据えながらはつきり言い放った。

「ああ、何時でもいいぜ!!」

そう言うで一夏は刀型のデバイスを取り出し、構える。

俺はリアスカートにマウントしていたビームライフルを取り構える。

『それでは、第二回戦！ アスラン・ザラ対織斑 一夏の試合を開始します』

お互いがお互いを見据える。

『始め!!』

その声と共に俺達は加速した。

千冬と真耶はこの試合をモニタリングする為にモニターを中止していた」

そう、この試合は日本政府とI S委員会の求める試合だった。

「それにしても相変わらず射撃も上手いですね、ザラ君は……」

その言葉に千冬も頷いた。

「ええ、その射撃能力だけを見ても世界トップクラスの射撃能力でしょう。オルコットの様に棒立ちの射撃とは訳が違う。超高速で動き回りながらも牽制射撃ですら確実に当ててくる。アレをシールドエネルギーを消費せずかわすのは困難に近い」

千冬は知らない事だがソレをかわして尚且つ反撃出来る存在はいる。無論、ソレはC・E・での世界の話だが。

「織斑君……勝てるでしょうか……？」

真耶のその言葉に千冬はスッパリと切り捨てた。

「今の所は那由他の彼方でしよう」

一夏は10の60乗すら超える確立で敗北する。

千冬はそう言ったのだ。

「幾らなんでもそれは……」

ありえない。

そう言いかけて真耶は口をつぐんだ。

解っているのだ。

アスランはどんなに格下でも油断しないし手も抜かない。

圧倒的な力でねじ伏せる。

確かにセシリアには射撃兵装は殆ど使わなかった。

しかし、ソレはセシリアに圧倒的敗北と自身の力を理解させる為と言う勝利条件を満たす為だろう事は真耶も理解している。

つまり、一夏にはそんな制約が無い。ならば射撃兵装もふんだんに使う事だろう。

「しかし、織斑の目は死んでいない。あるいは一太刀浴びせられるかも知れません」

真耶はその千冬の言葉を聞きながらモニターを見つめた。

一夏は焦っていた。

（クソ！！ 解っていたけど。隙が全然無いばかりか射撃が鬼の様な弾幕と正確無比な射撃だぜ！！）

しかし、次のアスランの台詞で心が折れそうになった。

「一夏！！ こんな手緩い牽制射撃すら避けれないのか！？」

（これで手緩いのかよ!?!）

一夏は回避するが確実に回避先に先回りしたようにビームの嵐が吹き荒れる。

「馬鹿野郎!! 回避は最小限で相手の目線と銃口、肩の動きを見て即決で回避しろ!!」

「そんな超人的な事出来るか!!」

一夏はそう叫びながらも突撃を開始するが。

やはりアスランの射撃が待っていた。

「馬鹿野郎!! 猪突すれば何とかなるんでも思ったか!?! 相手との距離を詰める場合はジグザグに動きながらかく乱しつつ高速で近付け!! ソレか相手の認識外の速度で動け!!」

アスランの怒号はアリーナ内に響く。

その時だった。

突如白式は輝きを放つ。

「ファーストシフトか……いいだろう、次の段階に移る」

アスランはそう言いながらビームライフルをリアスカーツにマウン  
トしビームサーベルを引き抜いた。

さて、俺の教えを何処まで一夏が学習して行動に移せるかだな。

そう思いながらアスランは一夏を待った。

一夏の持っていた刀型デバイスが突如割れて青白い光の刃を形成した。

そして、俺と一夏は打ち合う。

鏑迫り合いをする俺達。

どうやらこの世界でも鏑迫り合いは可能らしい事に俺はホットした。

俺達の世界のビームサーベルはミラージュコロイドの応用でビームの刃を形成している。

その為、C・Eのビームサーベル同士がぶつかると双方の磁場が干渉し合って刃が維持できなくなる。

しかし、干渉が途切れると即座に刃が形成される。それ故に刃を干渉させたまま、斬りつけるのに有利なポジションの取り合いの為、お互い距離を取ったり、クルクル回りながら有利なポジション取りをしている。

それ故に、ビームサーベルで斬り結んでる時の機動は独特だ。『相手が振ったビームサーベルの延長線上から常に機体を外す』コレが基本的な動きとなる。

と、されていたが、戦闘データを見る限りでは最初にC・Eでビームサーベルの鏑迫り合いを演じたデュエルとストライクにはそんな現象は起きなかった。

更に、俺が乗っていたイージスとキラのストライクの対艦刀でも切り結ぶことが出来た。

更に言うならプロビデンスとストライクでもビームサーベル同士で切り結ぶ場面が何度もあった。

更にインフィニットジャスティスのグリフォンビームブレードでシンが投げたブーメランも蹴り弾いたことからこの仮説は覆された。

俺は興味本位でビームサーベルとビームサーベル同士を切り結ばせてみた。

切り結べた時間は大体1分位だった。

その後、ビーム同士の磁場が干渉し合いすり抜けた。

つまり、1分以内なら切り結ぶ事が可能である。

しかし、1分も切り結ぶ事など実戦ではあり得ない事からもコレは許容範囲内であろう。

余談は兎も角、俺達が切り結ぶ刃と刃がスパークして放電している。

桃色の刃は衰えを知らず強い力を放っている。

一方、白式の方は何だか光が弱々しくなっている。

その時、白式のブレードが消えた。



「へ？」

一夏は哑然としながら自分の剣を見つめる。

俺は剣を引き、一旦一夏から離れた。

そして、ブザーが鳴り響き、山田先生が終了を告げた。

『織斑君のシールドエネルギーエンプティーにより勝者、ザラ君！』

何とも後味の悪い終わり方である。

その後、一夏と箒と一緒に織斑先生から聞いた話では一夏の剣は『雪片式型』といい更に一夏は何時の間にやらワンオフアビリティーを発動していた。

その名も『零落白夜』と言うそうだ。

こいつが発動すればエネルギー性質のものであればそれが何であれ無効化、消滅させる白式最大の攻撃能力。しかしその発動には自身のシールドエネルギー、つまり自分のライフを削るという武器仕様であり、諸刃の剣でもある。その威力は全ISの中でもトップクラスだそうだが、俺のビームサーベルには効果が無かった。

その理由を一夏は織斑先生に質問した。

その回答が、

「ザラのインフィニットジャスティスは一時間に全世界のISのシールドエネルギーをフルに出来るほどの出力を生み出すエンジン、

『ハイパーデュートリオンエンジン』が搭載されている。更に兵装は100パーセントなら零落白夜が消滅させるどころか逆に鏢迫り合えば1秒でパンクするほどの容量だ。打ち合っただけでシールドエネルギーが空になる。正に零落白夜の天敵だ」

ソレを聞いた瞬間、一夏と箒は啞然とする。

ソレを見ながら織斑先生は溜息を吐いた。

「解っただろ？ コレだけリミッターを掛ける理由が……更にザラの技量と相まって倒せる奴がこの学園からいなくなる。アレだけリミッターを掛けても絶対防御がひび割れるほどの出力だぞ。100パーセントなら絶対防御がガラス細工だ」

それを聞いた瞬間、一夏と箒は俺のリミッターは甘いとすら考える顔を俺に向けた。

「と言う訳でザラ。ジャステイスのリミッターを更に掛ける。いいな？」

（お願いじゃなく命令ですよ。それ）

俺は心の中でしか突っ込む事が出来なかった。

その夜、1年1組が食堂を貸し切り、パーティーを開いていた。

「と、言う訳で代表は織斑　一夏君に決定しました！！」

その言葉に一夏は哑然とした。

「ちょちょコット待て！！　何で俺！？　大体、代表決定戦はアスランの圧勝だっただろ！？」

何だ、その事か。

俺はニヤニヤしながら一夏にこう言った。

「ああ、それはな、織斑先生が俺が出たら圧勝してバランスが悪すぎるからここは間を取ってお前になった訳だ」

その言葉に一夏は慌てる。

「ならオルコットが！？」

その言葉にセシリアがこう言った。

「私は辞退させていただきますわ。何せ、私は敗れた身、アスランさんの指示に従いますわ」

そう言いながらセシリアは俺を見ながら何故か頬を赤らめる。

何でだろ？

「兎に角、一夏さん、頑張ってくださいまし。私とアスランさんの代わりに出るのです。恥はかせないで下さいね？」

その言葉に一夏は戸惑う。

「一夏さん」？」

「ええ、友達をファーストネームで呼ぶのは当然ではなくて？ それと私の事はセシリアと及びくださいな」

そう言いながら優雅に振舞うセシリアに篠ノ之が噛み付いた。

「一夏の名を慣れなれしく呼ぶな！！」

しかし、セシリアは涼しい顔で篠ノ之の耳元でヒソヒソ話す。

その内容に納得したのかそれ以上は何も言わなかった。

何を話したんだ。一体？

「まあ、友なら仕方ない。友なら」

「そうですわ。おほほほほ」

そうしている内にカメラを持った二年のネクタイをした女子が突然声を掛けてきた。

「ハッイ新聞部の黛 薫子です。取材に来ました！」

新聞部？ 何故？

「おお！ 噂通り男子がいるね。しかも二人とも美形で結構結構」

俺と一夏を品定めするように取材を開始する女性。

「それじゃあ、代表になった織斑君から一言!!」

一夏はその強引さにシドロモドロになりながら答える。

「え、あ、その、頑張ります」

その内容に不服だったのか黛先輩は後で捏造する旨を一夏に告げる。

中々のイエロージャーナルである。

「それじゃ、1年最強の呼び声高く、IS学園の赤い騎士のあだ名を持つザラ君から」

そのゴテゴテした某二臭いあだ名は何だ？

俺の質問に黛先輩がこう答えた。

「今回の試合を見た生徒が映像を学内に配信してソレを見た生徒達がそう呼んだんだよ」

と。

兎に角、俺は取材に答える事にした。

「俺は一夏のサポートとして、一夏が勝利出来るよう全力で挑みたいと思います」

そう言うと、黛先輩は詰まらなそうに模範的な回答でパンチがないと言われた。

そして最後にセシリアに振られたが話が長い事から適当に書いておくそうだ。

セシリアは黛に近付き耳元で語る。

「写真撮影は最初は私とアスランさんのツーショットでお願いいたしますわ。ソレと写真は現像して私に下さい」

「OK、OK。取材に協力してくれたしソレくらいお安い御用だよ」

セシリアはその返答を聞き、こっそりガッツポーズをとる。

（よし！！　ですわ。アスランさんと私のツーショット写真が私の物に！！）

セシリアは浮かれてアスランの元まで歩み寄る。

「それじゃあ、ザラ君とオルコットさんから写真を撮るよ？」

アスランはそう言われ、仕方なくといった感じでレンズの前に立つ。

しかし、ここでアスランの予期せぬ行動をセシリアは取り出す。

行き成り、セシリアはアスランの腕に組み付き、その胸元をアスランの二の腕に押し当てた。

「セ、セシリア!？」

「あら、如何しましたの？ アスランさん？」

慌てるアスランを見ながらセシリアは瞳を潤ませながら頬を赤らめる。

その唇はリップが薄く塗られ、水をたたえた様な潤いを見せる。

アスランは二の腕の感触とセシリアの顔に不覚にもときめいた。

（不味い!! コレは凄く不味い!! 俺の二の腕にセシリアの柔らかいものが!!）

アスランは意を決してセシリアにお願いした。

「あのな、セシリア、その、当たっているんだが……少し離れてくれないか……？」

その懇願にセシリアは頬を更に赤らめ意地悪な微笑を湛えながら言う。

「あら、当たっているわけではありませんわ、当てていますのよ？」

（駄目だ!! 何か知らんがセシリアが可笑しくなった!!）

アスランの内心の葛藤を他所に黛はシャッターを切る事を宣言した。

しかし、やはりここはI S学園、セシリアの思惑は物の見事にご破算となる。

一夏と箒を含む全員がチャッカリフレーム内に入っている。

「な、何でこうなるのです!？」

セシリアの叫びを聞きながらアスランはほっとした。

しかし、アスランは知らない、これから彼の苦悩は加速していくのだから。

ソレもかなり悪い方向に。

頑張れアスラン。

アスランの女性問題に幸あれ。



## 第6話 アスラン訓練を始める。

俺事アスラン・ザラがこの世界に来て早4ヶ月。

IS学園生徒としてこの学園に通っている。

今思えば、オーブ国防軍参謀本部の准将から一気に一学生である。

何と言うクラスチェンジだろうか。

その代わり、重い責任と義務から解放された代わりに学生の義務と責任になったただけだ。

早い話が、学業だ。

俺はその学業であるISの実習の講義を受けている。

織斑先生は一組の生徒の前でISの基本操作の説明を開始した。

「では、これより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、ザラ、試しに飛んでみる」

その言葉に俺とセシリアは素早く答えた。

「解りましたわ！」

「ハッ！」

その瞬間、オルコットは瞳を閉じて念じる様にブルーティアーズを起動した。

「え、あれ？」

一夏は起動することが出来ず戸惑う。

「早くしろ、熟練したIS操縦者なら展開まで1秒と掛からないぞ」

織斑先生も容赦が無い。

そう思いながら一夏は何とかISを展開する事が出来た。

次は俺の番か。

俺は瞳を閉じる事無くノーアクションで起動した。

ジャスティスを形作る頭、胴体、手足、シールド、ビームライフルが0.1秒で形成された。

その瞬間、辺りがざわつく。

「アレが、ザラ君のIS」

「フルスキン？ でもあんなIS見たこと無いよ」

「でも、動画で見たときの色と違うね」

OS起動はスキップした。

コイツが核エンジンで動いている事がばれたら大事だ。

周りの喧騒を他所にVPS装甲を展開した。

メタリックグレーからローズピンクに近い赤に装甲が染め上げられる。

「色が変わった!?!」

「綺麗〜」

何故かセシリアが頬を赤らめながら俺を見つめる。

何でだ?

「よし、飛べ!」

その瞬間、俺はこう言いながら飛んだ。

「アスラン・ザラ、ジャステイス、出る」

俺は脚を少し折り曲げ、脚力を利用して飛翔した。

地上での発進の基本技術だ。

一々スラスターを全開にして棒立ちで飛んではスラスターが持たない。

俺は、上空500メートルの地点で静止した。

ソレを見ていたセシリアは啞然とした。

アスランは500メートル上昇、急速停止、全領域の索敵を僅か3秒でやってのけたのだ。

（す、凄すぎますわ……こんな事が出来るなんて……）

そう、アスランは実戦、しかも地上、宇宙問わず戦争をしてきた人間だ。

コレはC・E・世界のMSパイロットでは誰でも出来る事、ナチュラル、コーディネーター関係なくである。

基本中の基本だ。

そうじゃないと自分が“戦死”してしまう。

だからこそ、ナチュラルの多い地球連合のMSパイロットはコレをミツチリと叩き込まれる。

反応速度や身体能力で及ばないナチュラルが戦うには反復して体に

覚えさせるしかない。

しかし、アスランの場合その基本動作が余りに速い。

そう、アスラン並の速度はキラやシンの様な化け物クラスでないと先ずお目にかかれない。

余談はさておき、一夏は単に驚いているだけだ。

セシリアみたいにその異常さを理解していない。

ある意味で無知が成せる技なのかもしれないが。

そして、セシリアと一夏も同じ様に飛び上がったが、アスランと比べるとどうしても見劣りしてしまう。

一夏にいたっては最初は迷走して何とか飛び上がった程だ。

（コレは、自分の実力を上げて、尚且つアスランさんに近付くチャンスですわ！！）

そう思った瞬間、セシリアは燃えた。

ソレこそ、彼女のバーソナルカラーの青色の炎がメラメラと。

何か知らないがセシリアが燃えている。

何でだろ？

（大方、俺にライバル心を抱いたのか？）

そんな事考えているとセシリアが意を決した表情で俺の所まで飛んできた。

「アスランさん、お願いがありますの」

その言葉に俺はお願いの内容を質問した。

「お願いって何だ？ セシリア」

セシリアは大きく息を吸ってまた吐き出し、ソレを数回繰り返して俺に言った。

「私と一緒に放課後訓練していただきますませんか？ 勿論、アスランさんのご都合に合わせていただきますわ」

どうでしょう？

上目遣いで瞳を潤ませながら懇願するセシリア。

（その顔に俺は弱いんだよ……）

過去にカガリにも同じ顔をされて、アクセサリーを買ってしまった  
り。

メイリンと一緒に食事をしようと頼まれた時もこの仕草に押されて

仕方なく外食をした。

更に言うなら秘書官の女性軍人と一緒に飲み会に参加してくれと頼まれた時もこんな仕草に押されて仕方なく参加した。

コレが引き金となってカガリと喧嘩した。

考えたら鬱になった。

カガリ曰く『お前は女性に頗る甘い!!』と怒鳴られたのを思い出す。

いや、俺は其処まで甘くない。

無理なお願いは聞かないし、実現可能なラインなら聞くが。

やめよう、鬱になる。

俺は仕方なくソレを了承した。

その瞬間、セシリアは花が咲いた様な綺麗な笑顔を見せてくれた。

今のでクラッときたのは俺だけの秘密だ。

え、ヤッパリ、女に甘い上に尻軽だど？

俺は誠実だ！ ホントだぞ!!

誰に無く言い訳をしている自分が悲しい。

ソレを聞いた一夏も話に加わる。

「俺もその訓練に参加させてくれないか？ 確かに箒と訓練はしているがアイツISについて何にも教えてくれなくて……頼む！ アスラン、この通り」

一夏は白式の左右のマニピレーターを合わせて合唱するようにお願いした。

俺は一夏を安心させる様に言う。

「安心しろ、お前はクラス代表だしな、お前が嫌でも俺からするつもりだった」

ソレを聞いた瞬間、一夏が嬉しそうにお礼を言ってきた。

「サンキュなアスラン！」

コイツ、女が見たら惚れそうな笑顔を向けるな！

何、今度は女だけでなく男もかだと！？

俺はきわめてノーマルだ！！

そんなこんなで俺とセシリアと一夏と箒が訓練用アリーナにいた。



俺が織斑先生に許可を取って貸してもらった。

「と言う訳で、今回の訓練はそれぞれ個別で行う物とする。先ずはセシリアの課題だ」

「ハイ！」

その言葉にセシリアは威勢良く答える。

「先ずはセシリアは射撃技術の向上だ」

その言葉にセシリアが不満の声を上げた。

「基礎ですよ？ 私といたしましては……」

その言葉に俺はセシリアを怒鳴り上げる。

「馬鹿野郎！！ 基礎を疎かにするな！！ そもそもブルーティアーズは射撃メインの兵装が多いだろうが！！ セシリア今のお前は基礎を疎かにしている。キッチリ基礎を叩き込む！！ 課題は10秒間30発、移動する標的に全弾10ホールに確実に当てるのが課題クリアーとする」

その課題にセシリアは非難する。

「そんな無茶な！？」

「悪いが簡単な課題だ！！ レーザー兵器で反動も無いんだぞ！更に最終目標は10秒間に50当てろなんていわない。せめてソレが実戦で使える最低ラインだ！！」

その言葉に肩を落としながらセシリアは頷いた。

「解りましたわ……」

次に俺は一夏に向き直る。

「次に一夏、お前は白式を装備した状態で雪片式型を展開し素振り千本だ」

ソレを聞いた瞬間セシリア同様な顔をする一夏

「何でだよ!？」

「あのな、お前はハッキリ言って体力が無さ過ぎる。セシリアや篠ノ之よりも無い。断言できる。更にお前はISの事について何にも知らない。雪片式型の戦闘稼働時間は？ イグニッションブーストの機体消費エネルギー量とその持続時間は？ 零落白夜の戦闘稼働時間は？ これ等の情報から白式のシールドエネルギーの戦闘での割り振りは？」

次々に上がる俺の質問に一夏は口を閉じた。

「解っただろ？ お前はお前の持っている力すら把握できていないばかりか戦闘時猪突に突っ込む癖がある。先ずはお前がしなければならぬ事は体力作りと兵装の特性を理解する事、そして、エネルギー量をどうやって割り振っていくかが課題だ」

その言葉に一夏は質問した。

「何で、雪片式型を展開してなんだ？」

その質問に俺は答えた。

「雪片が何の犠牲無く展開している訳無いだろ？ シールドエネルギーを消費してるんだよ。だからこそ、雪片が電力を消費する前に千本素振りするしかない。だが、ISを動かすにもシールドエネルギーがいる。つまり、お前はマニュアルでシールドエネルギーを整しつつ、雪片の刃を維持した状態で白式のエネルギー効率を考え、素振り千本をやってもらう。無駄な動きをしたらそれだけ、機体にもエネルギーにも負担が掛かる。その為にある程度は体力や筋力を使う必要がある」

俺の解説を聞きながら一夏は黙って素振りを開始した。

俺は箒に向き直り今度は箒の訓練内容を伝える。

「篠ノ之、お前には座禅を一時間した後、自分の学んだ剣の方を一通りやってもらう」

その言葉に今度は箒が大声を出す。

「何故だ!？」

俺は篠ノ之を見据えながらこう言った。

「悪いが篠ノ之、お前の剣からは焦りや苛立ちしか感じられない。そんな感情で武器を振るえばいつかお前は仲間や友達を傷つける。ならば、少し立ち止まって、自分を見つめなおせ。今のお前の剣技はハッキリ言って脆過ぎる上に力任せすぎる。お前は力を持って何

がしたいんだ？」

その最後の問い掛けに箒は何も言えなくなった。

多分、唯力が欲しかったと言う単調な理由ではないのだろう。

俺の見立てでは多分、一夏がらみだと思う。

俺の予想では今の篠ノ之 箒を形成しているのは焦りや恐怖。そして、言わなかった何かに対する怯えだろうか。

そう思いながら俺は三人を見ながら思う。

前途は多難だと。

## 第7話 アスラン竜の様な猫と出会う

俺が教室に入ると一夏と数人の女子が話していた。

一夏が俺に声を掛ける。

「おい、アスラン！」

その呼びかけに俺は鞆を机の上に置きながら返事をした。

「何だ？」

「聞いたか？ 転校生の話？」

転校生？ 何とも季節外れの転校生もいたものだ。

一夏と話していた女子も俺に語りかける。

「そうそう、たしか、その子が2組の代表だって」

「そうか、2組は転校生を代表にしたのか」

俺はそう考えながら多分2組の代表はセシリアみたいな国家代表候補生だろう事を予測した。

何せ、この時期の転入は試験内容が入学以上に難しかったと記憶し

ている。

つまりソレをパスするだけの知識と技術があると言う事だ。

「まあ、ウチには専用機持ちが3人いるからそんな心配は無いですよ？」

「そうだねーおりむーもセツシーもいるし、いざとなれば学年最強のアスにゃんもいるしねー」

本音の言葉に一夏と他の女子も頷いた。

「その情報、もう、古いよ!!」

何とも元気な声が1組の教室の喧騒を遮断した。

全員が黒板側の出入り口を見る。

「残念だけど2組は専用機持ちなの。そう簡単に優勝させてあげないわよ!!」

何とも気合の入った御嬢さんが現れた。

髪は栗色のツインテール。

背は小柄だが中々重心が安定している。

「あ、鈴？」

「そ、中国代表候補生、鳳鈴音。今日はあんた達、1組に宣戦布告

しに來たって訳」

その言葉と共に教室はざわつく。

どうやら一夏の知り合いらしい。

一夏はそれにわき目をくれず少女に語りかける。

「お前ソレ、似合わないぞ」

その言葉に少女は激昂する。

何ともシュールなやり取りだ。

「な、何よ!?! 折角格好よく登場したのにぶち壊しじゃない!?!」

彼女のカッコよさの基準が解らんが、後ろにはご注意だな。

少女は頭を叩かれ、上半身だけ前のめりになる。

「イッタク、誰よ!?!」

そう言い後ろを振り返ると織斑先生が立っていた。

「いい加減教室に戻れ。邪魔だ」

中々きついな織斑先生。

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ。速く行け、馬鹿者」

そう言われ少女、もうめんどくさいので鳳はすごすごと逃げていった。

まるで猫が首根っこ掴まれて追い出される感じだ。

時間は流れ、学園食堂。

多くの生徒が昼食を取る為にぎわっていた。

俺、セシリア、箒、一夏、鈴はここで食事を取る為に集まった訳だが。

「しかし、驚いたぞ。鈴がIS学園に転入してきたなんて、しかも中国の代表候補生として」

その言葉に鳳も驚いた様に一夏に言う。

「コッチだってニュースみて驚いたわよ。行き成り、試験会場でIS動かして騒ぎになったんだって？」

その言葉に一夏は苦笑しながら箸を止め思い出すようにその時の様子を鈴に語る。

「あの時は私立の試験会場で試験が行われていたんだ。その時、迷



っちまって……係の人に聞いても解らないって言うから廊下をウロウロしてたらISを見つけてな」

その時の事を一夏は思い出したらしく遠い目をして語った。

「ふーん」

鳳が気の無い返事を返した時だった。

篠ノ之が二人の所まで歩み寄り勢い良く両手で机を叩いた。

ドンと言う音と共に篠ノ之は烈火の如く一夏に詰め寄る。

「一夏！ ソイツは誰だ！！」

その質問に一夏はたじろぎながらも答える。

「え、あ、ああ、鳳 鈴音、箒が転校して入れ違いで転校してきたんだ。鈴とは中二の頃まで一緒だったぞ」

どうやら鳳も篠ノ之が誰か解らないらしく一夏に質問する。

「コイツ誰？」

一夏は篠ノ之を紹介する。

「ああ、俺のファースト幼馴染の篠ノ之 箒」

「よろしく、一夏の幼馴染の篠ノ之 箒だ」

「此方こそ、一夏の幼馴染の鳳 鈴音よ」

何か知らんがさっきから“一夏の幼馴染”と言うフレーズを強調する二人。

目から火花を放ちあっていた。

偉く苛烈な何かが2人の中で行われている。

何時までも戦闘膠着をさせて置くわけには行かず俺とセシリアはヒソヒソと話し合った。

「セシリア、あの二人会って早々苛烈な何かを繰り広げたぞ？」

「ほおって置いて宜しいのでは？ 女の戦いに首を突っ込むのはマナー違反ですし……それに一夏さんが何とか……」

「無理だろ。一夏の奴、事態が飲み込めなくて困惑してるぞ？」

俺は一夏に目を向けながらそう言う。

事実、一夏は篠ノ之と鳳の間に挟まれ如何すればいいか解らないと言う顔をしていた。

「ではどの様に？」

俺は溜息を吐いてセシリアに言う。

「すまない、先に食べていてくれ。友を見捨てられない」

セシリアは俺の言葉に溜息を吐いて答える。

「私も行きますわ……流石にあの状況はよろしくありませんもの……」

「有難う。セシリア」

俺の言葉にセシリアは頬を赤らめながらも頼もしくこう言ってくれた。

「アスランさんの為なら戦場にだって飛び込みますわ」

其処までしなくてもいいのだが……

まあ、今は一夏を救出する事が先決だ。

俺とセシリアは一夏に話しかける様に誘導する事にした。

「一夏、今日の課題は白式を装備した状態での回避訓練を行う予定だ放課後空いているか？」

俺の問い掛けに一夏は助かったと言わんばかりに頷きながら言う。

「ああ、空いてるぜ。素振りはいいいのか？」

俺はその問い掛けにこう答えた。

「素振りをやってからエネルギーを回復して行う」

その言葉にヤッパリがっかりして肩を落とした。

その様子をセシリアは微笑みながら一夏言う。

「基礎は大切ですよ？　土台がしっかりしてないといい家は建てられませんわ」

セシリアは自分も基礎は好きでは無いが、俺の射撃訓練でその基礎の重要性を改めて認識した。

自分がいかに雑な射撃をしていたかが目に見えてわかる。

時間内に正確に的を射抜く事の重要性和不規則に動くターゲットを捉える難しさは骨身に染みていた。

だからこそ、俺の教えは自身の傲慢さを正すいい機会になったと彼女は話してくれた。

「そう言うことだ。セシリア。お前には自分も動きながら射撃してもらおう」

その言葉にセシリアは嬉しそうに答える。

「やっと応用編ですね？」

「まあ、基礎には変わらないがな。篠ノ之、お前は今の訓練と平行して剣技の方の速度を上げる訓練だ」

「解った」

その言葉に毒気を抜かれたらしく篠ノ之は素直に従った。

そんな時だった。

鳳が俺とセシリアを見ながら一夏に質問した。

「一夏、こいつ等、誰よ？」

何とも礼儀を知らない問い掛けに一夏は答える。

「ああ、同じクラスでダチのアスランとセシリア」

「よろしく」

「よろしくですわ」

俺達には興味無いのか鳳は気の無い返事を返す。

「ふーん、よろしく」

そんな言葉を投げかけながら一夏に提案する鳳。

「私がISの操縦、教えてあげようか？ 私の方が旨く教えられると思うんだけどな」

その言葉に箒はもとよりセシリアも切れた。

「不要だ！ ザラは1組で同じクラスだ。しかもそれだけじゃない」

「アスランさんは学年最強の称号を持つお方ですよ！！ 更に2、3年生にも互角に戦える相手はいないと思いますわ。何せ、『IS学園の赤い騎士』『獅子の名を持つ赤い騎士王』『IS学園の赤い彗星』ですもの」

何か知らない間に変な異名が増えてる!?

その言葉に鳳が俺をマジマジと見つめながら言う。

「コイツが!?! 動画サイトで変な赤いISが戦う所は話題になったけど。アンタだったの!?! 『IS学園の赤い騎士』は!?!」

そんなに有名なのか?

知らなかった。

(と言うより機密もへったくれも無いな……動画サイトで俺の戦闘が撮影されるとは……織斑先生め……ジャステイスの秘密が明るみに出たら如何する気だ?)

俺はそんな事考えながら如何したものかと思った。

「私も訓練に加わるわ!!!」

その言葉に俺は拒否した。

「鳳、一応、クラス対抗戦が終わるまで待ってくれないか。お前は2組だし、敵の手の内を晒すのは懸命ではないそちらも手の内を知られて戦うより驚かせた方がインパクトはあると思うが?」

その言葉に鳳は考え込む。

「解ったわ。でも、アンタには負けないから!!」

その言葉に、俺は答える。

「悪いが戦うのは一夏だ。俺じゃない」

その言葉に鳳は目を丸くして驚いた。

「何ですって！？ アンタが出ないで一体誰が！？」

「一夏だ」

俺の回答に鳳は一夏を見ながら言う。

「なら勝ったも同然ね」

その言葉に一夏がムッスとしながら言う。

「悪りいけど負けるつもりは更々無いからな」

お互いにらみ合い鳳は食堂を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9728y/>

---

ISアスラン戦記

2011年12月3日14時54分発行